

## 『歎異抄』第9条（後半） ～凡夫の情をつつむ大悲～

### 【第9条・本文】

5 念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申しいで候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべき

10 ころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫より

15 いままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。

20 踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと [云々]。

### 【現代語訳】

念仏しておりますも、おどりがあがるような喜びの心がそれほど湧いてきま

25 せんし、また少しでもはやく浄土に往生したいという心もおこってこないのは、どのように考えたらよいのでしょうかとお尋ねしたところ、次のように仰せになりました。この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりがあがるほど大喜びするはずのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うので

30 す。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩惱のしわざなのです。そうしたわたしどもであることを、阿弥陀仏ははじめから知っておられて、あらゆる煩惱を身にそなえた凡夫であると仰せになっているのですから、本願はこのよう

なわたしどものために、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと思ひかされ、ますますたのもしく思われるのです。

35 また、浄土へはやく往生したいという心がおこらず、少しでも病気にかかる

と、死ぬのではないだろうかと思われの、煩惱のしわざです。果てしなく遠い昔からこれまで生れ変わり死に変わり続けてきた、苦悩に満ちたこの迷いの世界は捨てがたく、まだ生れたことのない安らかなさとりの世界に心ひかれないのは、まことに煩惱が盛んだからなのです。どれほど名残惜しいと思っ

5

ても、この世の縁が尽き、どうすることもできないで命を終えるとき、浄土に往生させていただくのです。はやく往生したいという心のないわたしどものようなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思ってくださいなのです。このようなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたの

10

### 前回の復習

15

#### ■唯円房のふたつの問い（唯円房の苦悩）

問① 念仏しているけれども、喜びの心が起こらない。

問② 一刻も早くお浄土へ生まれたいという願生の思いが起こってこない。

⇒「このようなことで、果たして念仏往生の教えにかなっているのだろうか」という問い

20

#### ※唯円房の問いの背景

問① 念仏しているけれども、喜びの心が起こらない。

⇒ 経典に説かれる内容とのギャップ

25

『仏説無量寿経』（註釈版 81）

仏、弥勒に語りたまはく、「それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなはちこれ無上の功德を具足するなりと。このゆゑに弥勒、たとひ大火ありて三千大千世界に充滿すとも、かならずまさにこれを過ぎて、この経法を聞いて歡喜信樂し、受持読誦して説のごとく修行すべし。

30

釈尊が弥勒菩薩に仰せになる。「無量寿仏の名を聞いて喜びに満ちあふれ、わず

か一回でも念仏すれば、この人は大きな利益を得ると知るがよい。すなわちこの上ない功德を身にそなえるのである。だから弥勒よ、たとえ世界中が火の海になったとしてもひるまずに進み、この教えを聞いて信じ喜び、心にたもち続けて口にとなえ、教えのままに修行するがよい。

35

⇒「南無阿弥陀仏」の名号の救いを聞き、私を救う如来のましますことを信知し、天におどり地にはねるほどの喜びをもって、わずか一声でも「南無阿弥陀仏」と称える者は、無上の功德が与えられ、必ず仏の悟りを開くことのできる尊い利益をさずけられることが『無量寿経』に説かれている。

5

**問② 一刻も早くお浄土へ生まれたいという願生の思いが起こってこない。**

⇒ 後世者たちの浄土願生の姿とのギャップ

**※『一言芳談』（松陰の顕性房の逸話）**

10 **松蔭の顕性房**

- ・高野山、蓮華谷聖の明遍僧都の弟子
- ・晩年は京都山科の勸修寺の裏の松蔭山へ隠遁

15 我は遁世の始よりして、疾く死なばやと云事を習ひしなり。さればこそ、三十余年間、ならひし故に今は片時も忘れず。とく死にたければ、すこしも延びたる様なれば、むねがつぶれて、わびしき也。（『同上』207頁）

20 世俗の地位や名誉や財産への執着をふりすてて、世間に背いて出家したときから、一刻も早く浄土へ生まれたいと思い、「早く死にたいものだ」と思えるほどになろうと修行してきた。そればかりを三十余年のあいだ思い続けてきたおかげで、今では片時も自分の「死」を忘れることもなく、すみやかに死んで浄土へ生まれたいと思っている。だから病気がよくなって、死が少しでも先へ延びるようだと、胸がつぶれるほど、わびしく思う。

⇒ この世をなるべく早く切りあげて、速やかな浄土往生を願う心境が語られる。

25

**■問い①に対する親鸞聖人の応答**

30 親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

35 この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりあがるほど大喜びするは

5 ズのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うのです。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩惱のしわざなのです。そうしたわたしどもであることを、阿弥陀仏ははじめから知っておられて、あらゆる煩惱を身にそなえた凡夫であると仰せになっているのですから、本願はこのようなわたしどものために、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと思われ、ますますたのもしく思われるのです。

⇒ 自身の問題として、同じ煩惱具足の凡夫の立場から応答していかれる聖人の姿

10 ▼問い①に対する応答

- ・往生を喜べない原因は煩惱である
- ・しかしそもそも阿弥陀仏の救いは煩惱を抱えた者のためにこそある
- ・私たちの往生は間違いない

⇒ **逆説的な論理が展開（宗教的パラドックス）**

15

『教行証文類』信文類（註釈版 266）

まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。

20

悲しいことに、愚禿親鸞は、愛欲の広い海に沈み、名利の深い山に迷って、正定聚に入っていることを喜ばず、真実のさとりに近づくことを楽しいとも思わない。恥ずかしく、嘆かわしいことである。

⇒ 唯円房と同じ心境を吐露される親鸞聖人の言葉

25

**煩惱具足の凡夫**

『一念多念文意』（註釈版693）

30 「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。

⇒ 「凡夫」とは、命終わるその瞬間まで煩惱から離れられないものを言う。すべてのことを私中心にみて争いをおこし、欲望・怒り・妬みに、心と身体を悩ませ苦しめ続ける。

35

「凡夫」とは世俗に埋没して、自己中心の愛憎の想念に振りまわされながら人生を生きるのみならず、そこから抜け出そうという気も起こさず、世俗的な名利をはなれて真実に目覚めて生きよ、と教示してくださる仏陀の心にも抵抗するような存在。

5

⇒ 喜ぶべきことを喜べない者こそが如来の救いの対象。

仏に背を向けている者こそ、ほっておくことが出来ずに摂め取ってくださる。

**釈 徹宗『親鸞の教えと歎異抄』(ナツメ社・137頁)**

10

喜ぶべきことさえ喜べない私、仏の救いに背を向ける私、悟りの道を妨げる煩惱を抱えた愚かな私。しかし仏はすべて見抜いたうえで、そんな私を救うといひます。私のためにこそ他力の悲願はあったのです。

**■ 問い②に対する親鸞聖人の応答**

15

また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。

20

いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。

また、浄土へはやく往生したいという心がおこらず、少しでも病気にかかると、死ぬのではないだろうかと心細く思われるのも、煩惱のしわざです。果てしなく遠い昔からこれまで生れ変り死に変わり続けてきた、苦悩に満ちたこの迷いの世界は捨てがたく、まだ生れたことのない安らかなさとの世界に心ひかれな

25

いのは、まことに煩惱が盛んだからなのです。どれほど名残惜しいと思っても、この世の縁が尽き、どうすることもできないで命を終えるとき、浄土に往生させていただくのです。はやく往生したいという心のないわたしどものようなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思ってくださいなのです。

30

**問い②に対する応答**

- ・ 早く往生したいと思わず、死を恐れる原因は煩惱
- ・ しかし阿弥陀仏はそんな煩惱を抱えた者を特に哀れんでくださる
- ・ 私たちの往生は間違いない

35

⇒ 問い①と同じ内容の答え

⇒ さまざまなものに執着する煩惱の心（自体愛・境界愛・当生愛）を起こす私。  
⇒ いのち終わる瞬間まで、この心から離れられない者を、ことに哀れんでくださるのが阿弥陀仏。

5 三種の愛心・・・

人間が命終に臨んだ際に起こす三つの執着心である自体愛・境界愛・当生愛のこと。三種愛、三愛ともいう。自体愛とは、自己の身命に対する執着心をいい、境界愛とは、妻子・親族・家屋・財産等に対する執着心のことをいい、当生愛とは、命終の後に自らの生がどうなるのかわからない不安をいう。

10

■ 結論

これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜のこころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと [云々]。

15

このようなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたのもしく、往生は間違いないと思います。おどりあがるような喜びの心が湧きおこり、また少しでもはやく浄土に往生したいというのでしたら、煩惱がないのだろうか、きっと疑わしく思われることでしょう。このように聖人は仰せになりました。

20

⇒ 煩惱に苦しみ、さまざまなものに執着を起こして、急ぎ浄土へまいろうと思う心さえ起こらない私だからこそ、深く哀れみたもうてくださる阿弥陀仏の大悲の本願を、いよいよたのもしく思わせていただくべきである。

25

⇒ 早く浄土へ生まれたいと思える人は煩惱の薄い人ではないか。

30

煩惱に苦しみ、さまざまなものに執着を起こして、急ぎ浄土へまいろうと思う心さえ起こらない私だからこそ、深く哀れみたもうてくださる阿弥陀仏の大悲の本願を、いよいよたのもしく思わせていただくべきであると、親鸞聖人は唯円房に語られ、第9条は終えられています。

35

自身の煩惱を悲しみながらも、なおそこには煩惱にまみれた凡夫を救わんとされる如来の大悲を、しみじみと喜ぶ念仏者の姿がありました。まさに念仏者の人生は、命終わる最期の瞬間まで、この悲喜こもごもの人生を、如来のお慈悲と共に浄土への道を歩ませていただく人生だといえるのではないのでしょうか。